
ありがとうと言える日

平葉陽蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとうと言える日

【Zコード】

Z8976E

【作者名】

平葉陽蘭

【あらすじ】

平×和です。和葉は友達から新しくオープンしたクレープ屋を教えてもらつた。平次とお昼を食べに行く日にそこへも行くことにしたのだが……。そこで平次に悲劇が！－！オリキャラも出でてきます。

1・まだ向もない日（前書き）

平×和ですので、関西弁になります。

1 まだ何もない日

「和葉ア！」

と平次に呼ばれた瞬間、平次に突き飛ばされた和葉は目覚めた。

「何や……夢やつたんか。でも何か気味悪いわ」

そう、これは夢だった。

だが、これが現実の「」となり、あんな「」になるなんて誰が予想していただろうか……

夏休みに入つてからも和葉は合気道部の練習に来ていた。今日も

練習が終わって、2年生のメンバーで帰つていた。

そしていつものようにメンバーの中で和葉と浩子が電車に最後まで残る。駅も2つしか変わらないため、和葉は合氣道部の中で浩子と一緒に仲が良い。たまに遊びに行つたりもする。

「なあなあ和葉。この間、梅田の方においしいクレープ屋がオープンしたらしいねんけど、あさつて食べに行かへん？」

「じめん、浩子ちゃん……あさつてもう予定入つてんねん」

「そうなん？ ジャあまた今度行こつか。って言つかひょつとしてその約束、服部君とのやつたりして」

「えつ……」

そう、あさつての約束は平次どだった。それをズバリと言い当てられた和葉は言葉に詰まつた。

「やつぱつ……。そりゃ服部君との約束は大事やもんな。でもええよな、和葉はそういう人があつて……」

「まるで平次との約束やなかつたら断つて浩子ちゃんと遊ぶみたいな言い方やん。それにアタシと平次はそんなんとちやうよ。そうや、あさつて行くのん梅田やから先行つて食べてみるわ。そやから今度の日曜日、一緒に行こつか。場所わかつてる？」

和葉は平次から話題をそらした。そして早口になつた。そんな和葉を見て浩子は……

「ふふふ……和葉も少しは素直になりや。それで場所やけど、クレープ屋がな、オープソした日チラシ配つててん。それに地図が載つてるから明日そのチラシ持つてくるわ」

「ありがとう、浩子ちゃん。でも何で浩子ちゃんが梅田にオープン

したクレープ屋のチラシを持つてんの？ 浩子ちやんバイトしてへんし、梅田でも行つたん？」

和葉は浩子がバイトをしていないことを知つてゐる。だから自分が考えられるもう一つの可能性の方を聞いた。

（でもそれやつたら「梅田に行つた時にもらつてん」って言つよな……）と疑問が残つたが。

「それな、お姉ちゃんがこの前、梅田に友だちと遊びに行つた時にもらつたらしいねん」

「やつやつたんや。じゃあ、明日持つてきてな」

少しすると和葉が降りる駅に電車が止まり、2つ先の駅で降りる浩子と別れた。

その日の夕方、和葉は平次の携帯に電話した。

「はい、もしもし。何や？ 和葉」

「あんなあ、あさつてのことやねんけどな。友達にな、梅田にクレープ屋がオープンしたつて教えてもろてん。お昼食べんの梅田やろ？ そやからそのクレープ屋も行かへん？」

「別に構へんけど……でもオマエは行く気満々やつたんとちやうんか？ どーせその友達と今度食べに行く約束して、そんであさつてオレと梅田行くから先食べとくわ……つて言つたんやね？」

平次は和葉が言つていないのでズバリと言つて当てた。ですが、西の高校生探偵と呼ばれるだけのことはある。

「何でわかつたん？ アタシ何も言つてへんのに」

「教えてもらつたんやつたら一緒に行つたりするやろ？ でもオマエはそんなこと全然言わんかった。せやからわかつたんや。それより、場所わかつてんのか？」

「大丈夫や。クレープ屋が配つてたチラシ、明日もううから。それに地図載つてんねん。じゃあ、あさつてはクレープ屋も行くつちゅーことで」

「せやつたら、お昼食べ過ぎんようこせなあかんな」

「そやね。じゃあ、あさつては頼んだで」

そして、電話を切つた。

その夜、和葉は夢を見た。

どこでだかわからないが、大泣きしている夢を……

1・まだ何もない日（後書き）

皆様、お久しぶりです。平×和のバレンタイン話を書いて以来、ここから遠ざかつてましたね。この話、1ヶ月くらい前～書こうと思つてたんですが、なかなかまとまりませんでした。時期に多少のズレがありますが、その辺りは・・・。では次話でお会いしましょう。「元気のない哀へ・・・」もあとちょっとで1～2話が完成です。最後の投稿から1年が過ぎるまでにじゅうしたいと思います。

2・夢が現実になる日

「あの夢、何やったんやろ？アタシ、どうで何があつて泣いてたんやろ？しかも何も無い空間で……。2日続けてこんな、何か気味悪いわ！ま、まさかな……」

今日も和葉は合氣道部の活動のため、学校に行つた。でもあの夢のことが練習中も時々頭をよぎる。それでも和葉はいつも通りにやつているつもりだった。

そして休憩時間になり、和葉たちはいつものように隅に座つてお茶を飲みながらおしゃべりを始めた。和葉もこつもならじの輪に加わるのだが、今日は違つた。

和葉は天井をじっと見つめていた。この真上では平次たち剣道部が活動している。竹刀のぶつかり合う音が聞こえる。いつも聞こえているのだが、和葉はいつもより音が大きいような気がしていた。

(こつもこんな音やつたっけ……。こんなこと考えてるからそう聞こえるんかなあ？)

竹刀のぶつかり合う音がいつもより大きく聞こえたのは和葉だけのようだ。

「…………あつた？ 和葉は」

「えつ？」

あんなことを考えていた和葉はみんなの話を聞いていなかつたので聞き返した。

「『夏休みの宿題で難しそうなんあつた？』って聞いてん。どないしたん？ 珍しいやん、和葉がそんなんつて
「ちょっと風邪引いたみたいで・・・。それで難しい宿題やんな。
そやな……ザツと見た感じで数学のプリントの最後の方が難しそう
やつたで」

その後は和葉も話の輪に入つた。いつもより大きく聞こえていた
竹刀の音もいつの間にかいつも通りに戻つていた。

そして、帰りの電車の中でいつものように和葉と浩子が2人になると……

「はい、これ昨日言つてたクレープ屋のチラシ」
「ありがとう、浩子ちゃん」

そして浩子は声を小さくして言つた。

「なあ和葉、服部君のこと何かあつたん？ ケンカしたつてわけ
やなさそうやけど」

「えつ？」

和葉は驚いた。浩子に氣付かれているとは思わなかつたからだ。

「休憩時間にみんなとしゃべつてて、いつもとにかくなつて思つてん。ちよつと考えたら、『和葉がしゃべつてくん』って氣付いて和葉の方見たら天井見とつたやろ？ しかも何か心配わづね田で。何があつたんやつたら相談乗るで」

「えつ、でもホンマしょーもないことやで。実際に起きるかどつかもわからへんのに」

浩子は「ふふつ」と笑つと鳴つた。

「今まで色々な話してきたやん。真剣な話やしょーもない話も。でも人に話してスッキリすることやつてあんねんで」

和葉は「じやあ……」とこう感じで話し出した。

「浩子ちゃんつて正夢の経験ある？」

「正夢？ 「うん、そうやなあ……夢の中で食べたメニローが次の田と回じやつたとかやつたらあるナビ？」

「やつか、実はな……」

と和葉は2田間の夢の内容を話した。

「つてこつ夢やつてん。アタシの考えすぎやろ？」

「そやな……私もメニローが同じやつたつて言つても完璧に同じやつたんとちやうし。にしても和葉はホンマに服部くんのこと好きなんやね。夢のことやのに、そこまで心配すんねんもん」

「ア……アタシは幼なじみやから心配してるだけやで。あつ、もう

私降りんな

タイミング良く、電車が和葉の降りる駅に止まるちゅうと前のこ
とだった。

そして、平次との約束の日、午前11時半に梅田のビックマンで
待ち合わせた2人はお昼をまず食べに行つた。その後、本屋などに
立ち寄り、それからクレープ屋へと向かつた。

店内で平次はポテトサラダ、和葉はチョコバナナのクレープを食
べた。店内は和葉たちと同じか、少し上くらいの人たちが多くつた。

「結構うまかったな、ここ」のクレープ

「そやね。また来ような

来た道を戻る途中、少し細い通りの横断歩道をちょっと渡つたと
ころで……

「プチッ」「
と音がした。

和葉は右足に違和感がしたので見てみると、履いていたサンダル
のひもが一部、根元からちぎれていた。とりあえず、渡つてしまお
うと和葉は思った。

平次は、横にいたはずの和葉がいないことに気づき、振り返つた。
すると……

「和葉ア！」

と平次が和葉に向かつて叫んだ。それと同時に和葉は平次に突き飛ばされた。

「平次、何……」

『平次何すんの?』と言おうとしたが、その理由がすぐにわかつた。和葉のすぐ横に平次が倒れていた。そして、一台の車が細い道を抜けて走り去つて行つた。そう、平次は和葉をかばつてはねられたのだ。

「平次～いつ！」

和葉の声が一面に響いた。

2・夢が現実になる日（後書き）

1話投稿してから約1年。ほつたらかしにして本当にすみませんでした。その後、2話目の最後までは結構すぐに書いたんですが、そこで止まってしまって・・・ストーリーが夏休みの話なので、季節がずれる・・・と私の中でストップがかかっていました。それならそれで、書くだけ書いておけば、今年の夏休みになつてすぐ投稿できたのに・・・。

現在、話のストックが全くありませんが、頑張つて書いていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8976e/>

ありがとうと言える日

2010年10月10日05時51分発行